

注文カード

帖合・貴店名

条件:注文扱・返条付

注文数

冊

ISBN 978-4-8350-8250-9 C0023	定価 本体5,800円+税	評伝 賀川ハル —賀川豊彦とともに、人々とともに—	不二出版	岩田三枝子 著
------------------------------	---------------	------------------------------	------	---------

お名前

お電話

注文 年 月 日

評伝 賀川ハル —賀川豊彦とともに、人々とともに—

岩田三枝子 著



A 5 判・上製・総 604 頁
2018 年 9 月 15 日刊行
定価 本体 5,800 円+税
ISBN 978-4-8350-8250-9
C0023

賀川ハルはキリスト者市民社会活動家・賀川豊彦の妻としてその活動を支えたが、彼女自身に本格的に焦点を当てた研究は多くない。

本書は、日本キリスト教史にとって、そして女性史にとっても激動の時代であった明治から昭和にかけて、一キリスト者、一女性、そして一市民社会活動家として生きたハルの人生を辿りながら、その活動と思想を体系化することにより、歴史的意義と今日的意義の一端を明らかにしたものである。

また資料編として、賀川豊彦記念松沢資料館が所蔵するハルと豊彦を中心とした賀川家書簡等を翻刻収録した。

賀川ハル 略歴

1888(明治21)年	3月16日、誕生。
1904(明治37)年	福音印刷合資会社に女工として就職。
1911(明治44)年	豊彦と出会う。その後、キリスト教信仰を持ち、スラム活動に参加。
1912(大正元)年	キリスト教の洗礼を受ける。
1913(大正2)年	豊彦と結婚。スラム内に居住して活動をする。
1914(大正3)年	共立女子神学校入学。
1917(大正6)年	スラム活動を再開。市民社会活動の場が広がり、晩年まで活動を継続。
1921(大正10)年	覚醒婦人協会設立。
1923(大正12)年	関東大震災救援活動のため、東京に転居。
1929(昭和3)年	松沢に転居。
1955(昭和30)年	アメリカ伝道講演旅行。
1960(昭和35)年	豊彦永眠。
1981(昭和56)年	東京都「名誉都民」称号を授与される。
1982(昭和57)年	5月5日、94歳にて永眠。

不二出版

〒112-0005 東京都文京区水道2-10-10 Tel.03(5981)6704 FAX.03(5981)6705
http://www.fujishuppan.co.jp E-mail administrator@fujishuppan.co.jp

●「目次」抜粋

第一部 ハルの活動と思想

- 第一章 ハルの生涯概略
- 第二章 ハルのキリスト教信仰
- 第三章 ハルの女性観
- 第四章 ハルの市民社会理解

第二部 覚醒婦人協会

- 序 大正期における婦人運動・労働運動・キリスト教の興隆
- 第一章 覚醒婦人協会の特徴
- 第二章 新聞報道における覚醒婦人協会
- 第三章 新婦人協会と覚醒婦人協会 ブルジョア対プロレタリアか？

資料編

- 一・賀川豊彦・ハル書簡／二・ハルの音声資料／三・年表・家系図／
- 四・主なハル関連参考資料／五・地図・写真一覧

●内容見本

著者紹介

岩田 三枝子(いわた みえこ)

1975年生まれ。東京基督教大学神学部卒業。東京基督神学校(M.Div.)、Calvin Theological Seminary(Th.M.)、Institute for Christian Studies(Master of Worldview Studies)、東京基督教大学大学院神学研究科神学専攻博士後期課程修了。博士(神学)。「大正期における婦人運動―覚醒婦人協会と賀川ハルを中心に」により、第10回平塚らいてう賞奨励賞受賞。
現在 東京基督教大学神学部准教授。

第二節 第二期 一九一二(大正一)年頃―一九一七(大正六)年頃(二四歳―二九歳) 市民社会活動土台形成期

第二期は、女工時代にキリスト教に入信し、スラム活動への参加を開始した時期から、結婚を経てスラム活動を継続し、さらに共立女子神学校卒業までとした。これはキリスト教信仰を基盤とした生活と市民社会活動の開始時期であると同時に土台作りの時期でもある。この時期以降のハルの活動と思想については、第二章以下で詳細に検討するが、ここでは第一期との関連から、家族との関係と、共立女子神学校進学に際してのハルの動機的一端に焦点を当てたい。

第一項 スラム活動の活力としての家族からの愛情

ハルの生涯の中でスラムでの生活は、それまでのハルの生活環境やそれ以降のハルの生活と比較しても、経済的にも衛生的にも最も貧困で劣悪な生活環境であったといえる。ハルの共立女子神学校での三年間の在学期間を除いて、第一子出産のために豊彦が身重のハルと胎内の赤ん坊の身の安全を考慮してスラムの外に引越すまでの合計約七年間を、ハルはスラムの中で生活している。

夕食のための二銭さえなく祈った、という逸話からも、経済的困窮はそれ以前のハルの生活とは比較にならないものであったといえる。女中時代、ハルの日給は「女工頭の自分さへ二十四銭位」であり、一五銭の芝居、二銭のうどん、一つ一銭の天婦羅を楽しむの一つとしていたとするハルの記述からすると、二銭というお金は決して贅沢な金額ではない。